

## 研究覚え書き

ドイツの詩人ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの著作を詳しく調べると、彼は青年期から最晩年まで輪廻の思想を絶えずもっていたことがわかる。青年期は、輪廻や霊魂に対する表現方法に未熟さがあつたが、晩年にかけて、詩的な表現や哲学的用語を用い、自身の輪廻や霊魂に対する思想を詳述するようになった。輪廻思想をもたない宗教であるキリスト教社会で育つたにもかかわらず、ゲーテは自身の輪廻観をもつていた。彼は様々な思想を研究し、数々の輪廻概念を知り、輪廻についての自身の考察を発展させ、詳しく描写するようになった。例えば、彼はデーモン、モナド、エンテレヒー、霊魂、中核、エンテレヒー的モナド、精神、イデーなどの哲学的用語を使用した。彼の輪廻観または霊魂概念に影響を与えた思想・哲学は、プラトンのイデー、ライプニッツのモノラ論、アリストテレスのエンテレヒー、オルフェウス教などである。ゲーテは、西洋思想だけでなく東洋思想も研究し、仏教とヒンズー教の輪廻思想と触れ合つたことがわかつている。

## ゲーテの輪廻観

## ツグラッゲン・エヴェリン

ゲーテの存命中、輪廻に関する論争が起こつた（一七八〇年）。論争は、ゲーテの義弟J・G・シュロツサーとゲーテの友人のJ・G・ヘルダーの間で起こつた。ゲーテはこの輪廻論争には直接参加しなかつたが、発言からこの論争に注目し深く追つていたことがわかつている。

昔から、哲学者、文学者、宗教者は輪廻に関し考察してきた。現代では、医学や心理学の分野でも輪廻が研究テーマとして扱われている。筆者は、今後の生命についての論議を促進する要素の一つとして、輪廻の研究の重要性が増すと考える。

ゲーテの輪廻観に関する研究は、近年始まつたため、これに基づくゲーテ作品の解釈はまだ少ない。よつてこの研究成果は、ゲーテ作品の解釈の新しい透察につながると期待できる。文豪ゲーテの言葉であるので、その影響力は大きい。特にゲーテと同じキリスト教を背景とする人々にとつては、ゲーテの言葉が、輪廻と生命に関する千思万考のきっかけになると確信する。

(Zurraggen Evelyn / 東洋哲学研究所委嘱研究員)